# ようこそ! 夢の本棚へ

発行所：松居直コレクション
プロジェクト
代　表：金戸 美紀子
事務局：石川県小松市
小馬出町10-3
空とこども絵本館
☎ 0761-23-0033
bookrin@city.komatsu.lg.jp

【活動方針】①絵本の楽しさを伝える〈親子読書の奨励〉②絵本の歴史を学び、進むべき方向を考える〈絵本文化の研究〉
③市が所有する知的財産として、次世代に正しく伝える〈絵本文化の継承〉

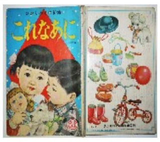
## 『こどものとも』に込めた思い⑦
### ～小辞典文庫から『母の友』の創刊へ～

### 子どもの気持ちを動かす

◆食べたら出るというのは、人間の生理としては非常に重要なこと。それを子どもに科学的に教えても、子どもは興味を持ちません◆ところが「ヒトコブラクダはひとこぶうんち、フタコブラクダはふたこぶうんち」みたいなことを言っていると、子どもがびっくりするんですね。びっくりするってことはしめたもんなんです◆子どもの本で子どもがびっくりしたり驚いたりね、喜んだり、それから怖がったり、そういう子どもが「うっ」と思うようなことがありますと、子どもの気持ちが動きますよね◆子どもの気持ちを動かさないと、物語の内容でも本の内容でも伝わらない。気持ちが動いて好奇心が出てきて、そして「へぇー、そんなことがあるの」なんて気持ちが動きますと、子どもの中にそれがずーっと伝わっていくんですね。そして食べたら出るんだっていうことが、一つの結論として子どもに納得ができるんですよ◆子どもが驚くと、気持ちを動かしたら、もう絵本はしめたもんなんです。子どもが気持ちを動かさない絵本は、子どもの中に残らないんですね。

### 戦中から戦後へ

◆戦争中、一番出てた絵本は『講談社の絵本』という本です。物語があって、それになかなかいい絵がつけてあるんですけど、文章があんまり子どもに訴えかける文章ではなかった◆小学生の頃に、私の弟が『講談社の絵本』を買ってもらってましたから、私はそれを本屋さんが届けてくださるたびに読んでました。でも、絵はときどき覚えているんですけれども、文章はほとんど覚えていません。戦争中でしたから、非常に軍国主義的な内容のものが多かったんですね◆戦争がすんで、全く新しいものが日本に取り入れられるようになって、子どもの本も、当然そこで変わって参ります◆戦後、一番最初に日本で出されたのは『ひかりのくに』ですね。大阪のひかりのくに。その後で『キンダーブック』が復刊されるようになって、いろんな月刊誌が出るようになりました◆でも、形は戦前の形を踏襲していたんです。だいたい見開きで、一つずつ内容が違うというような月刊絵雑誌の作り方が主でした。



ひかりのくに昭和出版刊

### 小辞典文庫の編集

◆一九五三（昭和28）年の12月、ちょうど私が出版界に足を踏み込んで福音館書店が始まっていた頃です。福音館書店は、もともと小辞典文庫というのを作っていて、百冊くらい私は編集しました。小辞典文庫はものすごく売れたんですけれども、小学生、中学生向けのポケット版の小さな辞書でした◆一番その中で評価されたのは『西洋文学小辞典』です。これは、桑原武雄先生が監修してくださって、実際にお書きになったのが多田道太郎さんなんです。西洋文学についての高校生、大学生向けの小辞典を作ったんです◆そういうものが一応経済的な基礎になりまして東京に出てきたんですけど、そんな学習参考書や辞書では、とても生き残れない。何か全く新しいものを作って、新しいマーケットを開拓しなければ出版社として生き残れないということを感じました。

福音館小辞典文庫38

### 月刊『母の友』を創刊

◆日本の保育がどんどん変わる頃でしたから、一日一話という児童文学との関わりをもって、日本に新しく入ってきた心理学や保育学、家庭での子どもの育て方といったものを取り込んで『母の友』という雑誌を20円で出したんです。売れませんでしたね◆売れそうになった頃、びっくりしたのは、他社が出していらっしゃる絵雑誌に『母の友』とすっかり同じような付録がついたんです。「お母さんのとも」とか「母のくに」とか、そういう付録がついた。付録はただですから、これはもう太刀打ちできません。　（つづく）